
彼女の想い

銀猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の想い

【Nコード】

N1902BA

【作者名】

銀猫

【あらすじ】

天才と凡人。この二つには大きな問題がある。それは人の優劣による憎悪や嫉妬によってできた問題だ。人類はその問題を解決する術として、ある二人の天才と凡人を生み出した。彼女と彼は人々の希望になるプロトタイプとして幸せに生きて行くはずだった。しかし、前例がないものを推し進めることはとても容易なことではない。この考えに賛同しない者達もいる。しかも、彼らの力を欲望のままに利用する輩まで出てしまう。

人類は悩んだ末に二人を処分することを決意する。

その結果、彼は処分（暗殺）することに成功するが、彼女を取り逃がしてしまった。

人々は知らなかった。一人の天才が悲劇を呼び、果てには滅亡までも呼んでしまうことに。采は投げられてしまったのだ。人類の滅亡という犠牲を払って。

その後、彼女は禁忌を破り、彼に願いを託した。そして全てが始まる。長く寂しい孤独な旅が。

新参者の初心が描く異世界冒険記がここに登場。

予告編（前書き）

思い立つ日は吉日、と言うことで執筆・投稿しました。

初心者なので読者の意見や感想を参考に努力していくつもりです。
感想や意見があればの話ですがね。先行きが不安だ。

予告編

彼女の生きていない世界にどんな価値がある

あなたは私の願いを叶えてくれるんでしょう

ここは相応の対価を払えば願いを叶える場所

違う世界と言っても根本的なことには変わらないか

人がいない世界に行った時の寂寥感は身に沁えたよ

人はあまり好きじゃないんだ。矛盾しているけどね

人はどこまで行っても学習もせず悲劇を繰り返す

俺は誓った。彼女の願いを叶えるために存在していると

動き出した時は止まることを知らない。彼は一体どうしたいと言っ
のだろうか？ 幾つもの犠牲を出しても叶えたい願いとは何なの
か？ 全ては謎のベールに包まれたままである。

ここに異世界冒険記が始まる。

予告編（後書き）

まだ予告篇ですからこんなものです。この掴みで少しでも興味が湧いたのなら幸いです。でも、実際に本編を見ないと作品の出来なんてわかるもんじゃないですよね？

まず補足として、この物語は様々な世界を巡って願いを叶えるお話です。作者自身もそんなにアニメや小説、漫画に精通しているわけではないので、読者の要望に十全に応えられません。そこるところを理解してもらえとうれしいです。ですから、原作に独自設定や改変が含まれますね。

なので、『原作通りにしろ』と言われて付け焼刃程度の知識で描いても読者に不快な思いをさせるのでしません。まあ、自分の身の丈は弁えてるつもりですから。

後は、作品の中には誤字脱字や表現の誤りが含まれることがありますので、見つけ出したのなら報告や修正案の推奨をよろしくお願います。

近いうちに投稿できるよう努力しますので。

原作名にISとありますが、入るまでに少し話が挿入されるので今しばらくお待ちください。

全ての始まり（前書き）

目が覚めたら天国だった、なんてくそつまんねえ物言いは夢見がちながキが見る幻想さ。死んだら何も残らねえ。あるのは虚無だけだ。

つまり、こうして思考し意識があるってことはまだくたばってねえいい証拠と言う訳だ。

死んだと思っただら生きてやがるとはどういう了見なんだが、皆目見当もつかねえな。ま、『生きているだけありがたいと思いなさい』と彼女なら口をうるさくして言ってくるんだろうな。

……そう言えばそうだった。ようやく思い出してきたぜ。俺は政府に処分を依頼された部隊から彼女と一緒に逃走し、途中で彼女を庇ってくたばったんだ。

あの時の彼女の泣き顔は鮮明に思い出せる。相棒であるあいつの泣き顔なんて初めて見たな。必死な形相で『死ぬな』とか『私を一人にしないで』とか死に体の俺に無茶を言いやがって。

彼女のことを庇ったのには後悔しねえが、泣き顔を見たことは後悔したぜ。あんな体験は二度もしたくねえな。

おっと、そろそろ視界が明るくなってきた。覚醒の時ってやつだな。

次に彼女に会えたなら飛切の笑顔を見せてもらいたいぜ。

全ての始まり

目が覚めるとここは天国だった。……………な訳あるかボケ。

どうやら俺はまだ五体満足で生きているらしい。視界に入るのは白と黒で彩られたモノクロ模様の部屋だ。つまり、俺好みの部屋な訳だ。

俺の好みを知っている奴はほとんどいない、彼女を除いては。結局、彼女を庇って彼女に救われる。命を救われたもの同士、ギブ&テイクでいいのかね。

「恰好つけた結果がこれとか、あいつに一生扱き使われても文句が言えねえな」

ま、これからのことより今は彼女に礼を言って再会を祝う時だ。長時間眠っていた影響かやけに体が重く感じる。太ったのかと思っただが、腹回りや足、腕に変化はない。たぶん栄養不足のせいだろう、と自己完結し部屋を出る。

扉はドアノブが付いているくせに自動式だ。天才が作ったものはどこか常識が不足していると思うのは俺だけかね。けど、そんな非常識も世界は時間と共に容認する。誰が信じたろうか、人が空を飛ぶと、地球が太陽の周りを回っていると。

過去を長い目で見れるのは今だからこそで、その時に出来るとは限らない。

だから、人類も俺と彼女を少しでもいいから長い目で見ていて欲しかった。

既に過去のことには思いを馳せても無駄なのはわかっているつもりだ。人々の中で幸せに暮らし死ぬ。簡単なようでとても難しい。この矛盾な日々が二度と来ないことは決まってしまった。天然の人ではないが、人生はままならないものだ、とはまさにこのことだ。

長い通路の先にはホールが見えた。きっと彼女はそこで俺を待っているのだろう、と勝手な憶測でホールへと向かう。

ホールは壁から上部まで続く半円球の形を描いていて、装飾なんて一切ない無骨でシンプルなものであった。そしてなぜか、ホールの中心には棺が置いてある。

その棺を見た瞬間だった。急速に脳裏に嫌なビジョンが映っては消え映っては消えを繰り返す。わかっている、これは警告なのだ。棺の中を確認したら最後、一生苦しみ嘆き絶望すると。

それがわかっているながらも俺は棺へと足を向ける。どんな苦しみや嘆き、絶望が待っているようにも俺には彼女しか希望はないのだ。だから、真実から目を背け、ありもしない幻想に思いを馳せるなんてバカなことはいらない。現に彼女は俺を待っていたはずだ。男が待ち合わせに遅れても、一生待たせつきりに出来るほど俺は腐ってはいない。

重い足取りでようやく棺まで辿り着く。棺は部屋と同じくモノクロで彩られていた。これでは、否が応でも確信してしまう。彼女は俺をここで待っていたと。

一瞬、開けたら満面の笑みで俺を迎えてくれるビジョンも浮かんだが、悪夢によって打ち消された。

ふと思ってしまった。これは罰なのではないかと。彼女を庇い一

人にして絶望させた。そして、俺は生死の境からひよっこりと生き返り浮かれた罰。何とも間抜けではないか。救ったつもりが絶望させて死へと導いた。なんだか急に目元が潤んできた。

神が下した罰なんて俺は信じない。これは、彼女が俺に下した罰だ。一人つきりにさせた俺だけの罰だ。この咎は誰にも渡せない、俺が背負うべき咎なのだから。

目元を拭い、覚悟を告げる。

「……覚悟は決めませ。俺はどこにも逃げねえ」

棺へと恐る恐る手を伸ばし、縁を掴む。そして、慎重に棺の上部を動かす。

重い、質的な意味ではなく、罪としての重さを今改めて味わった気分だった。

そう、ここから全てが始まる。棺を開けたその瞬間から。

「真実は時に残酷だが知らなければ始まることもない。

どんなに苦しくても真実を追い求める者こそが希望を掴むことができるのだ。

全ての始まり（後書き）

どうも、即日投稿です。どうでしたか？ 稚拙な文章ですよ。ストーリーの展開も理解し辛い。何じゃこりゃ、と思われてもおかしくない。初心者なんで大目に見てもらえたらと思っております。

そんな訳で補足に入ります。今回は主人公の独壇場です。主人公通称『彼』は名前もまだはつきりとしてないですね。名称を付けたいのですが、私はネーミングセンスが低いので四苦八苦と苦戦中。早く原作キャラと絡ませたいのだが、それもいつになるのやら。ちなみに前書きなどで口調が安定してないのは仕様ですから気にしないでください。後、世界観についてですが、今の時代より数世紀進歩した世界になっております。SF系の世界観ではありません。そのところの理解をよろしくお願いします。

次回で彼が眠っていた間の事などの真実に触れる回です。

彼女との別れ（前書き）

なんとか連日投稿。アクセス数を見ると二日で1000を超えるようですね。正直、驚いています。こんな初心者の作品に興味を持ってもらえるとは、読者の皆様には感謝しております。これ以降も一人でも読者が増えるように努力して行きたいと思っています。

それでは、第二話の始まりです。どうぞ。

彼女との別れ

棺の中にはまた棺があった。……って、それはマトリョーシカじやねえか。ま、そんな冗談はさておき、実際にそんなふざけた幻想がある訳もなく、彼女は静かな姿でそこにいた。

よく見ると彼女はガラスケースのようなものに覆われている。凡人の俺にはよくわからんが、これは彼女が作ったものなのだろう。その証拠に、ケースの側面が光で明滅し、何らかの情報を遣り取りしているのが見受けられる。こんな高度な技術を駆使できる奴を俺は一人しか知らない。彼女以外にこんなことができる奴がいたら、一回は会ってみたいもんだ。

彼女の体には特に外傷がないように見える。『実は中がズタボロですよ』と言われても信じられないほどに綺麗な体であった。眠りにについている彼女の寝顔は穏やかで、悲しみに明け暮れた顔でもなく、いつも通りの顔をしている。少しだけ気分が落ち着いた。

手で彼女に触れてみたかったのだが、ケースには開閉する部分がない。つまり、彼女を何らかの方法で目を覚まさせない限り、このまま触れることもできないと言うことだ。

何か方法がないかと棺の辺りを探ると、タブレットらしき情報端末機が視界に映った。手に触れて画面を注視すると、いきなり起動を開始した。どんな理屈で起動したのかさっぱりわからん。俺が触れたからなのか、画面を見つめていたせいなのか。そんなことより今はこの端末から少しでも情報を引き出さなければならぬ。しかし、機械に詳しくない俺にそんな高度なことができるだろうか。不安だ。激しく不安だ。ミスは許されない状況下でのミッションほど

緊張するものはないぜ。

とかなんとかやっているうちにも、画面は目まぐるしく文字列が行き交っている。はつきりと言っておこう。何一つ理解できねえ、ちんぷんかんぷんだ。タブレットにはキーボードやマウスなどの入力装置なども付いてないし、タッチ式かと思っただけ画面を触っても変化なしときた。まさに、お手上げ状態さ。持っていてもしかたねえから床に置き、寝っ転がって少ししたら変化が起きると思いい目を瞑る。

お手上げになって数分経ったあたりだろうか、……聞こえるはずのない声が聞こえてきた。

『……馬鹿者、一体いつまでそうしているつもりなんだ』

こんな風に。どうやら夢を見ているみたいだ。大方、寝っ転がっているうちに眠ってしまったんだろう。ありもしない幻想を夢で見るとは、現実逃避もいい加減にしねえと脳味噌が腐っちまうぜ。

『貴様の脳味噌は腐ってはいないが、回転力などの柔軟性に乏しいな。少しは考えてから結論を出せ』

おかしいな。俺が作りだした夢にしては妙にリアルだ。彼女の辛辣さが如実に伝わってくるぞ。凡人の俺がこんなにも想像力が豊かだとは、隠れた才能って奴かね。

ま、これが現実なのか夢なのかは置いて、いい加減ちゃんとした対応をしないと。

「お前は……相棒で、合っているんだな？」

『ふむ、その解釈は正しくもあり間違いでもある』

「つまり、相棒に似て非なるものでいいんだな」

『ようやく頭が冴えてきたか。その認識で間違いはないぞ。私は彼女の姿をしているだけの情報体だからな』

そんな会話をしながらタブレットを見つめると、そこには彼女の姿をした立体映像が浮かび上がっていた。タブレットが立体映像映写機なんて誰が信じるんだよ。相変わらず、彼女の発想には脱帽するばかりだ。それよりも、これだけは聞きたきことがあった。

「なら、彼女の状態について教えてくれ」

『まあ、そう急くな。私はお前に全てを説明するために存在しているのだから、ちゃんと順を追って説明はする』

そうだ、彼女のことばかりで現状について俺は全く知らないんだったな。俺の死後や生き返った訳、もちろん彼女のことも。ここは、情報体様に任せてみるとしますか。

『沈黙していると言うことは、説明に入ってもいいのだな』

片手を上げて肯定の意を表す。

『それでは、説明を開始する。まず、一つだけ注意と言つか報告だ。人類は……滅んだ』

「は？」

『だから、人類はほろ「何でそうなるんだ!」……………』

『簡潔な説明。お前が死ぬ 彼女絶望 人類抹殺』

「いくらなんでも極端過ぎるだろう!？」

『馬鹿だねえ。それほど愛されているって証拠だろう。世界を敵にまわして復讐を遂げる。陳腐だが内容次第によっては良い映画になるぞ』

「何で商業目的に話を移したんだよ。今は関係ねえだろうが」

『ま、ノリってやつさ。そうカツカとすんなって、ちょっとしたジヨークだよ。ジヨーク』

「冗談に聞こえねえぞ。それより、最初に比べて口調が変わってないか？ 彼女の声でその口調は違和感がありありなんだが」

『彼女の声で会話していたのは、お前の混乱を避けるためだからだよ。お前の頭の中で拉致や監禁が浮かび上がらなかったのは想定済みだが、彼女の傍で見ず知らずの声が聞こえてみる。お前は一気に敵意を剥き出しにするだろうな』

確かに、あの場面で彼女以外の声が聞こえたら間違いなく警戒するのは必須。今更だが、この情報体が政府の陰謀だったら、俺は成す術もなくなる。間違いなく、彼女の命を握っているのはこいつだからな。

『疑うなんてひどいわ。あの夜のことはウソだったのね』

「てめえとの逢瀬なんてしてねえよ！」

『私ではないなら、本体とはしたんだな？』

「……………」

『沈黙は肯定の意を表すことと同意だよ』

「やかましいわ！ この色ボケ情報体！」

いい加減こいつを疑うのがバカバカしくなってきたぜ。生憎、俺は頭脳派とは言いづらいからな。考えるより感じて判断するほうが賢明なのさ。

『話を戻して本題に入るか。まず、彼女の体には異常はない。体には』

「何で含みのある言い方をするんだ」

『今からしっかりと教えてやるから一々突っかかるな』

『まず、彼女はお前を生き返らせるために禁忌を破った。目を覚まさないのはその代償と言う訳さ。ちなみに禁忌と言うのは次元の跳躍と時間逆行だ』

なんととも突飛な話だな。ま、死者蘇生なんてする代償だから当たり前か。

『続けるぞ。その甲斐があつてお前は生き返る条件が揃った。それ

と残念なことだが、お前は既に人とは呼べない体になっている。人と機械の融合体だ。融合体と言っても意思の持った機械の方が正しい解釈だな』

目が覚めたら天国ではなく、機械人形になってしまいました。笑えねえ冗談だが現実なんだろうな。起きた時の体の違和感の原因はこれだった訳だ。便利で丈夫な肉体を持ったと思えば目つけ物だぜ、と自分を鼓舞しねえとやってられないな。

『お前の体について簡単に説明すると、人の機能は最低限しか付いてない。肉体の部分はほとんどが人工だ。整備についてだが、細胞や機械の隅々にナノマシンが注入されたので心配はいらなだろう。常時、最適な肉体を保つことが可能だ』

化け物と言っても過言じゃない存在だな。肉体の最適化とか俺の活動範囲はどこまで行くのやら。

『ナノマシンの注入によって、お前の体は時間と共に進化し続けるだろう。ある意味不老不死に近い存在と言う訳だ』

「不老不死……ね。今一、実感が無いのだが」

『そのうち嫌でも認めざるおえないことになるさ。次に彼女の代償について説明するぞ』

『彼女はお前を助けるために、二つの禁忌を犯した。一つ目は魂の回収のために行った時間逆行だ。これは、お前の器に魂を宿すことに必要だから行われた。』

肉体が死んだら精神、この場合は魂か。これが乖離を始める。つ

「まり、俺が死んだ後に彼女は適切な処置が行えず、肉体を取り残し逃げた。そのために時間逆行をし、魂を回収した訳か。」

「そして、二つ目は肉体に魂を宿すために行った次元跳躍だ。いくら天才の彼女でも死者蘇生ができるはずがない。それを解決するのに次元跳躍をした訳だ。」

「どこに跳躍したんだ？」

「次元の魔女のもとへ」

「次元の魔女って、一体何者なんだ？」

「彼女の店は、それ相応の対価を払えば、どんな願いも叶えてくれる。そんな不思議な店の主人だ」

「胡散臭い。盛大に胡散臭い。俺の脳内ではあやふやなイメージしか浮かばないぞ。」

「まずこの話を信じると仮定すると、相棒は代価を払い俺を呼び戻した。これで間違いないな？」

「概ね合っている。先ほど、代償は二つと言ったが、魔女との取引も入れると三つになるな。」

「それで、彼女の払った代価と代償は何なんだよ。勿体振らないで教えてくれ」

「それは言えん。魔女との契約に違反するからな。知りたくば魔女のもとに行き、聞いてくるしか方法はないぞ。どの道、お前も魔女

に合うことになるんだ。問題あるまい』

「おい、それは俺も次元跳躍をするってことか？」

『代償のことなら心配するな。魔女のもとへのラインは一回開けば代償なしで行けるようになってる』

「そこで彼女の願いを叶える術をもらう訳か」

『なんだ、そこまで理解できたのか。なら、後のことはわかってい
るな？』

「彼女の願いを聞き、それを叶える旅に出ればいいんだろ」

『上出来だ。その取引も先方と既につけてあるから、お前は魔女の
もとへ行くだけでいい』

勝手に取引するなよ。契約とかで見落としがあると後で悲惨な目
に遭うんだぜ。でも、今更断れる取引でもないし、結局、受けるし
かないんだろうな。

「彼女のことを頼むぜ。情報体様よ。」

『無論だ。それが私の成すべき義務なのだからな。それと選別だ。』

その言葉と共に床の一部がずれて迫り上がる。中にはコートや帽
子などの衣類、それと見るからに頑丈なトランクケースがあった。

『行く先々の世界が安全とは限らないだろ。その時に必要になりそ
うなものを詰め込んでおいた。有効活用してくれ』

これはありがたい。さすがに一張羅の無一文で旅は不可能に近いからな。それに、いくら不老不死に近いと言っても自衛手段を持たないのはまずいしな。

「助かるぜ。これで目的が達成しやすくなった」

『べ、別にあんたのためじゃないんだからね』

「なぜに、ツンデレ口調になったし」

『どこからともなく送信されたメッセージを受信したためだ。そんなことはどうでもいいから、さっさと出発しろ。時間は有限だって言うだろっ？』

「そうだな。それで、魔女のもとへはどう行けばいいんだ？」

『お前の足元にポーターを出すからしばし待て。……………よし。準備完了だ』

いきなり足元が光り始める。体が浮遊し周りの空気が電気を通し発光する。コートの襟を直し、帽子を深く被りトランクの取っ手を握りしめた。

「それじゃあ、行って来るぜ」

『お前の旅路に無事を祈っている。それでは、さらばだ』

「違つぜ。こんな時は、またな、って言うもんだ」

『……そうだったな。……では、また会おう』

発光量が増加して視界がぼやけてきやがった。ここから全てが始まるってやつか、長い旅路になりそうだけ。けど、今は目を瞑り無事に着くことを祈るとするか。

肉体からの感覚が薄れ、全てが溶け込んでゆく。意識も次第に薄れ、何も聞こえなくなった。

旅の始まりは別れからではあるが、必ずいつか出会えることを信じて彼のものは行く。

次なる出会いこそが少年を成長させ明日に光を見出すのだろう。

彼女との別れ（後書き）

今回は名前だけでしたが、次元の魔女が出ましたね。彼女はC L A N P様の『ツバサ』からの参加となります。一応、異世界冒険記ですから妥当かと思いましたが。ちなみに、『x x x H O L I C』は作者が持っていないので関連する話は特にありません。申し訳ないです。なので、本作は『ツバサ』視点での彼女になりますので注意してください。

今回の補足です。彼と彼女の名前についてですね。考えてはいるんですが、無理やりにつけると読者に不評を買わせる可能性もあり、しばらくは不明のままで行きます。彼に関しては旅をしますから、偽名ですがつける予定です。

同様に彼と彼女の姿についてですが、ほとんど表現しません。これも、読者のイメージを崩し不評を買わないためと、下手に姿を確定させるとストーリーの展開が狭くなり破綻してしまうのが怖い、と言う意味も含まれています。

一応ある程度は表現はしますが、あれこれと詳しくと表現はしませんので理解してもらえると幸いです。

情報体に関してはテスト的な意味を含んでいます。口調が変化していたのは、そのためですので深くは考えないでください。

これ以外に何か疑問がありましたら、感想などで受け付けます。返信や後書きに答えを載せますので、よろしく願います。

今回は次元の魔女との出会いですね。ようやく二次創作っぽくなってきました。近いうちに投稿できるように努力します。今回はこの

へんでお別れです。

読んでもらってありがとうございます。
B Y 銀猫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1902ba/>

彼女の想い

2012年1月6日20時51分発行